

1 計画の背景

1.1 基本情報



図 1.1 南予地域における宇和島市

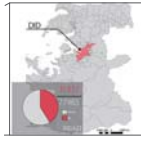


図 1.2 宇和島市 DID
※DIDとは、区野村の区域内で人口密度が4,000人/km²以上の基本単位区が互いに隣接して人口が5,000人以上となる地区のこと

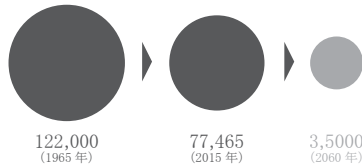


図 1.3 宇和島市の人口の変遷

1.2 現状



図 1.4 は 2000 年から 2015 年までの間の人口の増減率を表したものである。青は減少、赤は増加をそれぞれ表している。この図から分かるように、中心部であっても基本的に減少傾向となっている。その一方で既存市街地の周辺部、特に南部では人口が増加している場所が見られ、人口分布が拡散傾向にあることが分かる。

図 1.4 人口増減



市街地にはいくつかの川が流れているが、親水空間として整備されている所は少ない。



かつて就航していた九州航路は廃止され、半島部などへの船が出る。中心部からはやや距離がある。



中心部には広幅員でアーケード付きの商店街があり、最近では高齢者施設などの立地も見られる。



近年、特に既存市街地の南部において高台に新しい住宅地が造られている。

1.3 事前復興計画の目標

計画策定の流れ

地域の読み解き

日常的な中心性を踏まえ、「まず復興する地区」を設定

ポテンシャルを活かして市街地全体の中での機能の強化

計画の狙い

計画が進行する各段階において、日常的な居住性・利便性と災害時の防災性を向上させる

2 地域の読み解き

2.1 埋め立ての歴史



図 2.1 江戸時代以来の埋め立ての変遷

図 3.1 から宇和島市街地は埋め立てによって形成されてきたことがわかる。城の西側の歴史は浅く、城の東側では、武家屋敷や町人街など歴史的背景が現代の町割りにも残っている。また、須賀川の付け替えと同時期に堀や内港は全て埋め立てられているため、現在の市街地では少し内陸に入ると海を感じられない街区も多い。

2.2 施設配置の変遷

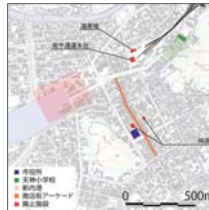


図 2.2 施設配置 (1971 年)

1971 年当時の施設配置 (図 2.2) からは、駅と新内港との距離が近く、選果場や通運本社があるように、南予地域における交通結節点としての機能を有していたことが確認できる。また、映画館や百貨店などの娯楽施設が点在し、旅館も多く営業しており、商店街周辺地区が賑わっていたことがうかがえる。



図 2.3 施設配置 (2018 年)

現在 (図 2.3) では、宇和島高速道路の開通に伴い、埋め立てが進むとともに、道の駅の開設や市役所移転、さらには天神小学校の移転により、海側や高台へと機能分布が拡散する傾向にある。また、市役所跡地に南予文化会館があるほか、通運本社の跡地には学習交流センターの建設が予定されている。

2.3 津波浸水予測



図 2.4 宇和島市市街地の浸水域

南海トラフ巨大地震による最悪の想定での浸水域予測では、市街地の半分以上の場所が浸水し、海側の地域では高いところで 5m ほどの浸水が予測されている。そのため、新たに建物を建てる場合や機能配置を考える際、浸水深を踏まえた設計や用途の検討が必要になる。避難計画による人命救助も最優先事項の一つと言える。

2.4 避難計画



図 2.5 現状の自動車避難

市外からの来街者や、沿岸部で車に依存した生活を送る住民は、災害時に自動車での避難を行う可能性が高いため、自動車避難の想定も必要になる。

図 2.5 では、現状で想定される幹線道路網における自動車避難の動線を示した。城東部を除いて、避難時の自動車動線は一方に限定可能であることがわかる。



図 2.6 現状の歩行者避難

発災時の歩行者避難動線を具体的に確認し、各地区の歩行者の避難動線の特徴を示した。(図 2.6) 沿岸部や山際の地域では避難の方向はわかりやすい他、商店街周辺や城南部の地区についても、城に平行な軸線での避難が重要となる。一方、城西部や市役所の北側のエリアでは避難の方向が定まらない上、長距離避難が必要になる。

2.5 計画の手がかり

以上より三つの「計画の手がかり」が得られる。それぞれに対して「3 計画」の項目で対応する。

1. 城下町としての歴史、港町としての海を感じにくい街並み (2.1.2.2)
→3.2A,3.2B
2. 災害強度の高い商店街周辺地区の密度低下の傾向 (2.2.2.3)
→3.2B,3.3
3. 複雑化した避難経路 (2.4)
→3.2A,3.3

3 計画

3.1 方針

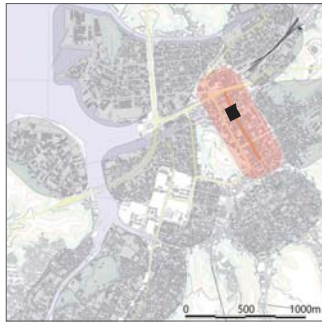


図 3.1 商店街周辺地区の設定

現在、市街地全体において人口や諸機能の拡散と低密度化が進みつつあり、このような状況下で災害が起こると復興が進みにくくなる恐れがある。そのため、日常的な中心性を持ち得る地区を選定し、中心性を高めながら災害への備えを強化することが本計画の狙いである。その上で、江戸期からの市街地であり生活の中心であった商店街とその周辺地区がそのようなポテンシャルを有すると考えられ、本計画での対象地として設定する。

3.2 都市構造のアプローチ

A. 国道 56 号線の改善



図 3.2 道路計画の概要

現在、比較的交通量の多い国道 56 号線が商店街周辺地区と城山の間を通っており、両者の分断要因となっている。また、特に城山の周辺部分において国道が屈曲の多いルートとなっている。そこで、図に示す短い区間でのみ道路を新規に建設することで城山西側の既存道路を活かしながら、上記の課題を解決することが狙いである。



図 3.3 避難経路の改善

震災が起こった場合、徒歩や自転車だけでなく自動車による避難が相当程度発生すると予想され、海から近く高台まで遠い市街地の西側部分で特に多くとなると考えられる。しかし、現在国道 56 号線は城山の東側を通っており、海側地区からの避難動線が不明瞭となっている。国道改善によって特にこの地区からの自動車避難を容易にし、動線の交錯を低減する。

B. 施設移転



図 3.4 現状の施設配置

かつて商店街沿道、現在の公会堂に位置していた市役所は図に示す場所へと移転した。また、市街地内での主要な集客施設である道の駅は海側に立地しており、自動車の利便性は高いものの既存の市街地からは高速道路によって分断された形となっている。このように、市街地内に立地している施設であってもその立地形態は必ずしも使いやすくないことが分かる。



図 3.5 移転計画の概要

本計画では、対象とする商店街周辺地区へ諸機能・施設を集約することを目指す。これによって当該地区の中心性が高まり日常生活における利便性が増すだけでなく、被災後にまず当該地区に注力することで迅速な復興が可能となる。例えば道の駅を移転した場合、道の駅来訪者が近接する商店街を経由して城を訪れることが期待できる。

3.3 人の暮らしと活動のアプローチ

3.3.1 商店街について

1970 年ごろ完成したアーケードが中央にかかる。歴史的には江戸時代からの町割りや城との近接性を特徴として挙げることができる。駅からのアクセスは良好で市の計画している複合施設が端部に立地している。また、浸水域と非浸水域の境目に存在している。

3.3.2 現在の傾向

空き地や空き店舗、未利用の上層階の発生が傾向としてあげられる。また、高齢者施設など商店以外の機能が入ってきていることも注目に値する。

3.3.3 設計の方針

以上を踏まえ、商業だけでなく住宅などの機能も増やしながら暮らしの場として再構築し、防災面の備えも強化することを設計の方針とする。

① 空地

河川上の広場にめんとすることで、多世代の交流がおこなわれる

延焼・倒壊を未然に防ぐ。ここで培われた交流が適切な避難行動に繋がる

撤去などする必要がないので新しい建物を建てやすい。空地を利用したコミュニティ活動は復興時にも応用可能である

② リノベ

川にひらいた計画で、遊びながら川に対する意識をもつことができる

アーケードに面し、小さな子どもでも避難が容易である

③ リノベ

建物をつなぐデッキ

デッキによって結んだ既存建築の上層階を集合住宅とし、空地を結び街路の抜けを作り、人のたまり場を作る

複数の避難方法が、万が一の時に避難しやすくなる

④ 空地 リノベ

農地

駐車場を農地として利用、周辺の既存建築の集合住宅とあわせて再利用。

⑤ 新築

産業振興センター

市内の他地域の野菜や魚介の販売をし産業を紹介する

津波避難ビルとしても機能し、アーケードからも見える大きな階段があることで避難できることが伝わりやすい

商業活動の拠点として商店街の復興を支える。またここで生まれた地域間の関連性は市内各地の特徴を生かした柔軟な復興に繋がる

⑥ 新築

デザイナービブセンタ―

裏の道へ逃げ続ける中庭をもつ。商店街のアーケードと連続した高齢者の居場所・動線となる

自力避難の困難な地区に住む必要支援者がこの周辺に居住すれば、アーケードを利用した避難が容易に

⑦ リノベ

若者の居場所

一階部分はホームシアターなどイベントスペースとしつつ、上階はシェアハウスにして、若者の活動の拠点となる商店街に面する上層階は採光条件が悪いので、中庭を設け採光を確保し、集合住宅とする

商店街を利用して避難する周辺の要支援者の避難を手助けすることができる。浸水しない部分は居住が可能である

⑧ 空地

川の上の広場

花壇を設け休憩場所として利用したり、ステージとして利用可能にした

⑨ 空地 新築

川に親しむ

親水性を持つことで、川の流れる方向、海への方向がわかり、山への視界を確保する商店街内にいると分かりにくい方向の空間把握がしやすく、避難方向の把握につながる

⑩ 新築 リノベ

アーケードの継承

通りの中央を開ければ、明るい通りとなり、低いアーケードであっても半鬼まつりなどの牛鬼の通りも確保

維持・更新が容易で避難時の安全性が高く、天候に左右されず避難しやすい

壊れずに残ったアーケードは商店街の復興を支えるインフラとなる

辰野川 伊子銀行

商店街 (宇和島きさいやロード)

活用提案模型

役割	種類
平時の役割	新築
避難時の役割	リノベ
復興時の役割	空地